



勝林寺寺報

必至滅度願成就

四月の初めに韓国に行つてきました。釜山から慶州を廻つてきました。桜満開の時で、日本でも見たことのない果てしなく続く沿道の桜並木に圧倒されました。

異國の地に出る前には、それなりの緊張と不安、わくわくする思いが高まります。まだ見たことのないものへの不安と新しい発見への期待でしよう。旅行社の方に飛行機のチケットの準備やホテルの手配をしていただき、念入りな旅行計画が事前に渡され、現地に詳しい方と一緒に行きましたので、さほど心配はなかつたのですが、それでもガイドブックを買ってきて調べたり、韓国TVドラマを見てみたり、予備知識をできるだけかき集めて行つてきました。

同じ地球の上であっても、国が違えば言葉も違う。そこで暮らす人々の文化も違えば気質も違います。それでも、同じ地球の上の「あれば、知らない言葉を学習したり、歴史・文化を理解したりして、知ることが出来ます。」はその異国に行って来て、帰つてきた人がいるからです。私も自分自身の足でこのたび韓国という国に渡り、そして帰国することで、確かに韓国という国があることを知りました。韓国はお隣の国ですが、人の経験知識は地球で一番遠いブラジルの国でも、地球を越えてお月さまの国でも、もっともっと遠いマゼラン星雲の星の国へでも行ってきて知ることが出来るかもしません。しかし、まだ見ぬ国、淨土の国は、行つ

て帰つて知ることはできません。人の経験知識を越えた不可稱不可説不可思議の、有無を越えた眞実の仏国土です。

眞実の仏土（お淨土）は我執を離れ、煩惱の炎が消え、計らいの滅した境地として「滅度」（めつど）と言われます。罪惡深重・煩惱具足の凡夫がこの身をもつて生きる中で、計らいを

越えて知ることは、遠い彼方の星の国を知ることよりもなお難しいことです。その困難を必ず成し遂げ、「無知の私」を「知る身の私」とに成長させることを阿弥陀様が願うのが、大無量寿経の中の第十一願として誓われた「必至滅度の願」です。そしてその願いが既に成し遂げられ（願成就）この計らいを越えて必ず滅度に至ることを定められていると知ることは、お念佛によってのみ可能となります。そしてその知り方を信楽（シガラギではなくシンギョウと読みます）といい、信心ともいうのです。

人の国は、競い争い憎しみ悲しみ苦しむ中で同じ民族が分裂し、対立し、驕し脅し駆け引きしながら、それでも一つになろうと頑張っています。私たち人類も、今こそもう一度仏智に学ぶべき、非打算的な対話の中で、計らいのない信じ合う楽しみを、少しでも味わえる新しい時代が、今、目の前に迫っているのかもしれません。

期日 六月十六～十七日
各戸に配布していただきました案内を熟読の上、ぜひご参加ください。申込みのとりまとめは、仏婦評議員さんにお願いしています。

納骨研修旅行のご案内

期日 六月（日）

六日

（火）

七日

（水）

八日

（木）

九日

（金）

十日

（土）

十一日

（日）

十二日

（月）

十三日

（火）

十四日

（水）

十五日

（木）

十六日

（金）

十七日

（土）

十八日

（日）

十九日

（月）

二十日

（火）

二十一日

（水）

二十二日

（木）

二十三日

（金）

二十四日

（土）

二十五日

（日）

二十六日

（月）

二十七日

（火）

二十八日

（水）

二十九日

（木）

三十日

（金）

一一日

（土）

一二日

（日）

一二三日

（月）

一二四日

（火）

一二五日

（水）

一二六日

（木）

一二七日

（金）

一二八日

（土）

一二九日

（日）

一二一〇日

（月）

一二一一日

（火）

一二一二日

（水）

一二一三日

（木）

一二一四日

（金）

一二一五日

（土）

一二一六日

（日）

一二一七日

（月）

一二一八日

（火）

一二一九日

（水）

一二二〇日

（木）

一二二一〇日

（金）

一二二二〇日

（土）

一二二三〇日

（日）

一二二四〇日

（月）

一二二五〇日

（火）

一二二六〇日

（水）

一二二七〇日

（木）

一二二八〇日

（金）

一二二九〇日

（土）

一二二一〇日

（日）

一二二二〇日

（月）

一二二三〇日

（火）

一二二四〇日

（水）

一二二五〇日

（木）

一二二六〇日

（金）

一二二七〇日

（土）

一二二八〇日

（日）

一二二九〇日

（月）

一二二一〇日

（火）

一二二二〇日

（水）

一二二三〇日

（木）

一二二四〇日

（金）

一二二五〇日

（土）

一二二六〇日

（日）

一二二七〇日

（月）

一二二八〇日

（火）

一二二九〇日

（水）

一二二一〇日

（木）

一二二二〇日

（金）

一二二三〇日

（土）

一二二四〇日

（日）

一二二五〇日

（月）

一二二六〇日

（火）

一二二七〇日

（水）

一二二八〇日

（木）

一二二九〇日

（金）

一二二一〇日

（土）

一二二二〇日

（日）

一二二三〇日

（月）

一二二四〇日

（火）

一二二五〇日

（水）

一二二六〇日

（木）

一二二七〇日

（金）

一二二八〇日

（土）

一二二九〇日

（日）

一二二一〇日

（月）

一二二二〇日

（火）

一二二三〇日

（水）

一二二四〇日

（木）

一二二五〇日

（金）

一二二六〇日

（土）

一二二七〇日

一滴の水の生命

人間が生きていいくにつては、何よりも「もの」(物質・金銭)が必須であり、それにもとづいてこそ生きられるわけですが、いまひとつ、「こころ」(まことの道理)を思い、それを大切にして生きていいくことを忘れてはならないと思します。しかしながら、今日の日本の社会状況は、どうも「こころ」の方が軽視されて、もつぱら「もの」こそがすべてであって、その「もの」を手に入れるためには、少々その「こころ」に背いてもよい、という風潮が生まれているよう思われます。

そして、そのような「こころ」の軽視は、いつも自己中心の発想を増幅させて、他者の立場、ことには幼いもの、弱いものに対する共感、同情の思いを喪失させております。昨今の社会的事件の多くは、そういう傾向を持つております。私たちは、もっと自分自身の「こころ」を豊かに育て、他者の生命に寄りそい、他者の立場に立つて、ものを考え、そして行動していくねばならないと思うことです。

近代初頭、京都の臨済宗天龍寺の管長を務めた名僧に、滴水(一八二二~一八九九)という人がいます。この人は幼くして出家し、岡山の曹源寺の儀山和尚に学びました。ある夏の夕方、この儀山が行水するために、小僧の滴水を呼んで、そこにあつた桶に水を汲んでくるように命じました。そこで滴水がその桶を手に取つたところ、その底に少しばかり水が残つていたので、それをバツと捨てたところ、儀山が大声で、「馬鹿もの!」

とどなりつけ、

「お前はどうして水の生命を粗末にするのか。見てみろ、今日の暑さで垣根の草木が水を求めているではないか。いま捨てた水を、その草木にかけてやれば、草木がどれほど喜ぶ」とか。

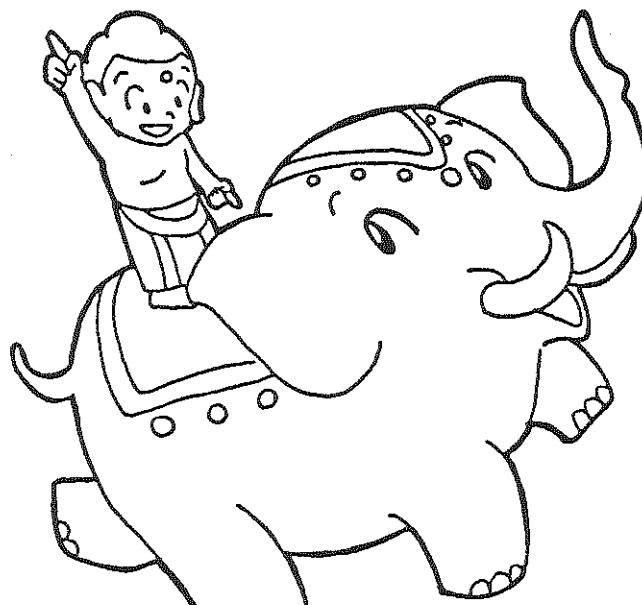
また水の生命もよくいかせる」とになるだろう。

法語カレンダー五月

かの如来の本願火と鏡づるに 凡愚遇うて空へ過ぐるものなし

と教えたといいます。この師匠の教言は、よほど彼の胸にひびいたようで、後に「滴水」と名のつたのは、その時に教えられた、一滴の水の「のつたのは、その時に教えられた、一滴の水の生命の尊さを、終生忘れないよう」という、思いました。しかしながら、今日の日本の社会状況は、どうも「こころ」の方が軽視されて、もつぱら「もの」こそがすべてであって、その「もの」を手に入れるためには、少々その「こころ」に背いてもよい、という風潮が生まれているよう思われます。

そして、そのような「こころ」の軽視は、いつも自己中心の発想を増幅させて、他者の立場、ことには幼いもの、弱いものに対する共感、同情の思いを喪失させております。昨今の社会的事件の多くは、そういう傾向を持つております。私たちは、もっと自分自身の「こころ」を豊かに育て、他者の生命に寄りそい、他者の立場に立つて、ものを考え、そして行動していくねばならないと思うことです。



(信楽峻磨遺稿法語集より引用)

住職と私は、同級生ですので「その話をしたら、長いお付き合いの

「門徒さんが「ええっ! そうだったんだかー」とひどく驚かされました。いろいろな場で、よく言っている

どすん

ですか?」と驚いた次第。ちなみにその方、住職の方が年上だと思っておられたようです(にんまり)、二人そろって、今年は還暦を迎える。私が、少し誕生日が早いので、先日、めでたく還暦を迎えました。還暦とは、文字があらわす通り「六十歳でひと回りする暦がもどり」ということのようです。合わせて、昔親鸞聖人は私たちに教えてくださいます。

今月の言葉は、親鸞聖人がおつくりになった「入出二闇偈頌」といううたの一節です。浄土真宗の七高僧のお一人、インドの天親菩薩の「淨土論」の中の「文が拠りどころとなっています。似ていますが、少し言葉が変わっていたり、また言葉が付けられたりします。おそらく親鸞聖人は、「淨土論」の「文に感銘を受けながらも、さらに次のようない」とを明らかにされようと思われます。

まず一つには、阿弥陀仏の救済を受けるのは「煩惱具足の凡夫」である私たちだということ。二つには、宝の海のようなすばらしい功德を満足させていただくのは、浄土に往生してからではなく、「一心にもつぱら阿弥陀仏の名を称えるとき」、すなわち今この土においてのことであるということ。三つには、その時に得る利益は、私たち凡夫の自力の善根によって得る「不実の功德」ではなく、阿弥陀仏の智慧と慈悲が満足された「眞実の功德」であるということです。

親鸞聖人が明らかにしようとしていることは、「本願力を觀ずる」ということ。「阿弥陀さまに遇う」とあります。今すでに阿弥陀さまに出遭っているから、けつして人生を空しく過ぐすことはない、とおっしゃっているのです。

(「日々のことば」より抜粋)

う話したら、長いお付き合いの「門徒さんが「ええっ! そうだったんだかー」とひどく驚かされました。いろいろな場で、よく言っているので、「あらわす」と伝えられています。

仏教におけるこのようなものの見方、この世のいつきの存在に対する、生命の連帯の意識、他者の苦悩について共感同苦する意識にもとづく、ものの見方においてこそ、はじめてこのような水の生命的尊さが、よく発見できるわけがあります。今日における私たちの生き方について、いろいろと反省させられるところです。

（信楽峻磨遺稿法語集より引用）